

2021年9月10日発行

神奈川イグレンの活動状況を伝える機関紙

神奈川イグレンニュース〈第221号〉

発行：神奈川県異業種連携協議会（議長 金究武正）

発行責任者：専務理事 芝 忠 編集：事務局長 愛賢司

〒231 - 0015 横浜市中区尾上町 580 神奈川中小企業センタービル 7F

TEL/FAX0 45-228-7331 <http://www.kanagawa-igren.com>

（目 次）

- 「川崎異業種研究会 6月定例会、7月勉強会・定例会報告」（ページ2）
- 「中小企業にとってのDXは大きなチャンスに」（ページ4）

アジアビジネス探索者 増田辰弘（イグレン顧問）

- 『中小企業白書』で事例紹介されている中小企業（ページ5）

サントピアワールド株式会社—感染症流行による廃業の危機を

クラウドファンディングによる資金調達で乗り切った企業

- 「神奈川ペンダント 循環～森から海へ～」（ページ7）

aspen grove 代表 福本ミカ

「川崎異業種研究会 6月定例会、7月勉強会・定例会報告」

当会は昨年度、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業の中止、縮小を余儀なくされたが、今年度に入り、会員交流を深める懇親会は依然開催できないものの、4月以降、コロナ感染防止策を講じた上で、会場とオンラインでのハイブリッド開催を鋭意取り組んでいる。

〔6月定例会〕

6月10日（木）当所にて、理事会終了後、(株)F O M M 専務取締役・Mobility事業本部長 伊藤雅彦氏より『世界最小クラス4人乗り、緊急時に水に浮く電気自動車「F O M M O N E」日本・タイでの事業展開について』と題して講演が行われた。

2011年の東日本大震災に伴う津波被害と同年のタイ洪水の経験から水害に対応できる車の必要性と世界的な電気自動車開発の潮流を受けて、長年自動車開発に関わってこられた鶴巻日出夫氏が2013年に同社を設立。最大の特徴「水に浮く車体」による水害時の避難性能をはじめ、手元でのアクセル操作、前2輪に組み込まれたインホイールモーター駆動、短時間での交換が可能であるカセット式小型バッテリーによる充電時間の大幅短縮と商標をとったバッテリークラウドなど、次世代を見据えた小型EV「F O M M O N E」を開発した。実車は既にタイでの生産・販売を開始し、本年1月には日本国内初の軽自動車ナンバーを取得。実証実験を踏まえて、国内での本格的な事業展開を予定している。研究開発都市川崎を象徴し、今後の躍進が期待できるベンチャー企業による貴重な話を伺うことができた。



【6月定例会の様子】

〔7月勉強会〕

7月1日（木）高津市民館にて、当会会員であるイルミス㈱代表取締役 矢嶋巧氏による社業紹介と企業のSNS活用について講演がなされた。同社は2019年に中原区上丸子に設立。企業のSNS運用者育成に関するコンサルティングやクライアントのSNS運用代行および広告運用代行、新商品マーケティングに近年効果を発揮しているインフルエンサーマーケティングなど、幅広い事業を手掛けている。SNS活用についてはフェイスブック・インスタグラム・ツイッター・LINE、各々の特徴と活用方法、同社が手掛けた整体院での顧客アップや人材派遣会社での求人などの具体事例が紹介された、今や企業の経営戦略に欠かせないSNS活用に関する有用な情報を得ることができ、活発な意見交換も行われた。



【7月勉強会の様子】

〔7月定例会〕

7月8日（木）当所にて『我が社のコロナ対策について』をテーマに、自社のコロナ対策の紹介並びに情報・意見交換会を行った。

小林副会長の進行のもと、参加者1名ずつ自社の近況報告を踏まえて、コロナ渦における社内での感染防止策、在宅勤務・時差出勤、外回り営業・外部会議の自粛、ワクチン接種休暇等の導入、雇用調整助成金・持続化補助金の活用などの報告や情報共有がなされた。多くのメンバーより、リーマンショックや東日本大震災などの危機を乗り越えてきた経験がコロナ渦に活かした点もあるが、中小企業にとりテレワーク導入が困難であることや社員のコロナ鬱といった新たな問題などについて活発な意見交換が行われるなど、ウィズコロナ、アフターコロナを乗り切るための企業経営の在り方について考える大変有意義な場を設けることができた。

「中小企業にとっての DX は大きなチャンスに」

アジアビジネス探索者 増田辰弘

DX、IoT、AI と中小企業にとっては近寄りがたい難しい言葉が並ぶ。これを消化せねば次の時代の経営は難しい。しかし、資金はない、人材はいない、経験もない。ないない尽くしの中で多くの中小企業が立ち往生しているのが現実ではないか。

「むつかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく」。これは井上ひさしの有名な言葉であるが、中小企業の DX でこれだけピタリとはまる表現はない。そしてこのやり方で、うまくこなしている企業も少なくない。こうすればお客さんが広がりそうだ、こうすれば次の製品開発のヒントをつかむことができそうだ、を考えれば良い。それが結果的に DX であったり IoT であったりする。

A 社の取り組みは、まさにこの見本のような事例である。同社は高精度加工機の製造、販売を行うメーカーだが、精度が高い製品ゆえに故障が頻発する。アジアでは日本とは気候が異なり、オペレーターの気質も異なる。どうしても故障が発生しやすい。遠隔地での高頻度の故障、これが長年の課題であった。

そこで、製品である各種機械にセンサーを設置してデータを取得、それをクラウド上にリアルタイムで表示できるようにした。これによって同社から納品先に対して、専門技術者が遠隔で指導し原因究明や故障の修理、製品の使い方の指導を丁寧に行うことができた。

中小企業なのに、なんでこんな手品のようなことができたのか。まず手掛けたのは、社長をトップとし各部署から人材を選抜してプロジェクトチームを発足させたのである。中小企業においては、まずトップが乗り出さないと DX はうまく進まない。

そして、この DX の導入は意外な経営効果を発揮する。これまで売り切りであった機械のユーザーにリアルタイムで接触できたことだ。つまり、毎日営業活動しているようなものである。減価償却期間が長くユーザーと疎遠になりがちであった経営課題が一挙に解決した。

もう一つはユーザーから毎日情報が入るから、次の新製品の課題がどんどん見えてくる。ユーザーが中国やアジアへと広がるにつれて、それに見合う製品のかたちが顕在化したことである。考えてみれば、中小企業にとっては DXこそがむしろ大きなチャンスなのである。

(週刊 BCN 2021 年 07 月 19 日 vol. 1883 掲載)

事例2-1-7：サントピアワールド株式会社

「感染症流行による廃業の危機を、

クラウドファンディングによる資金調達で乗り切った企業」

- ・所在地：新潟県阿賀野市 ・従業員数：20 名 ・資本金：7,905 万円
- ・事業内容：娯楽業

経営再建中で金融機関から融資を受けられず

新潟県阿賀野市のサントピアワールド株式会社は、遊園地「サントピアワールド」を運営している企業である。1999 年には年間来場者数35 万人、10 億円以上の売上げがあったが、その後は少子化に加え、大型テーマパークの人気に押されて年々来場者が減少。2011 年には約3 億円台まで落ち込み、民事再生法の適用を受けた。以降、コスト削減のためにアトラクションを自社設計したり、サバイバルゲームなどの若者向けのイベントを開催したりと8 年掛かりで経営再建に努め、ようやく黒字化にこぎ着けた。しかしその矢先、感染症流行の影響を受け、2020 年3 月の売上げは前年の7 割減、4 月からは休園を余儀なくされた。「再び経営存続の危機に直面し、資金繰りに奔走したが、経営再建中とあって思い通りに融資してくれる金融機関は見付からなかった。」と高橋修園長は振り返る。

5,000 万円を目標にクラウドファンディングで支援金を募集

最後の頼みの綱として活用したのがクラウドファンディング（以下、「CF」という。）であった。同社は運営資金を調達するためにCF サイト「CAMPFIRE」を利用。休園中に申請手続やWeb ページ作成などの準備を進め、5 月27 日から支援金の募集を開始した。目標金額は5,000 万円。支援者への返礼には、「1 日フリーキップ」や「限定オリジナルTシャツ」のほか、「1 日貸切り権」などのユニークなものも用意した。こうした取組は地元新聞などで取り上げられ、SNS でも話題となった。全国4,497 名から4,200 万円以上の支援が集まった。この他、同社の窮状を知った人々からも支援金が直接寄せられた。

「昔、子供をよく連れてきた。」という匿名希望の高齢者や、「頑張ってください。」と貯金箱を持参した高校生らしき若者もいたという。

集まった5,500 万円の支援金は維持費や従業員の給料などに使用された。同社は2020 年5 月23 日から週末限定で営業を再開させたが、CF が話題になるに連れて来園者が増加し激励されることも増えた。返礼品の「1 日貸切り権」を修学旅行に利用する中学・高校が

あったことをきっかけに、団体利用も増加。9月、10月の売上げは、前年同月を大きく上回った。

自社の存在意義を再確認

CFのWebページの作成に当たり、「どうして事業を続けたいのか」、「自社の存在意義は何か」を言語化する中で、今後の経営戦略に関する気付きもあったという。「お客様に思い出を作る場所を提供したい。」その思いを実現するために、自社の重要な経営資源である広い私有地を存分にいかしていく必要があると改めて感じた。経営難を逆手に取った低予算イベント「ぎりぎりアトラクション！」など、新しいアトラクションづくりも続けていく一方で、「遊園地」という形態に固執せず、キャンプ場やサバイバルゲームフィールド、ドローンフィールドなど、「密」になりにくい施設をオープンさせ、新たな思い出づくりの場所を提供していく予定である。「事業継続に向けたプレッシャーも感じつつ、新しいお客様にたくさん来てもらえたことは励みになった。今度は寄付を募る形ではなく、新施設の建設にCFを利用することも検討していきたい。」と高橋園長は語る。



返礼品の「一日貸切り権」を利用する修学旅行客

「神奈川ペンダント 循環～森から海へ～」

aspen grove 代表 福本ミカ



【制作のきっかけ】

このペンダントはコンテストへ出品するため「循環～森から海へ～」というタイトルをつけて制作。森に降った雨が木々を伝い土の中に蓄えられ、栄養分が溶け込んだ水がゆっくりと川や海に流れ込み、その栄養を取り込んだ海では海洋生物たちが元気に育ち、相模湾の美味しい魚介類となってまた地上に戻ってくる、そんな「循環」をイメージし、ネコのようにもラクダのようにも見える神奈川県で表した。

【材料について】

写真やレントゲンの現像廃液や、歯科用金属の廃材を精錬し、100%リサイクルから生み出された素材である純銀粘土（純度 99.9%以上）と銅粘土（純度 99.5%以上）を素材に使用している。

【制作方法】

江戸時代に誕生した日本の伝統金工技法「木目金」を、銀粘土と銅粘土を組み合わせ、同時に焼成することで可能にする新しい「新木目金」という技法で制作。材料の銀粘土と銅粘土は、それぞれマイクロサイズまで微粒化した銀や銅に、水とバインダーと呼ばれる結合剤を混ぜ、粘土状に加工したもの。粘土状のため、銀と銅を薄く伸ばし貼りあわせることができる。それらを交互に重ねたものを乾燥させ、彫刻刀などで彫り込み、電気炉で焼成後研磨している。銀と銅をミルフィーユのように重ねているため、凹凸が等高線のようになり立体的に仕上がった。